

令和5年度 岐阜市立女子短期大学将来構想委員会（第5回）  
議事録 概要

- 【日 時】 令和5年12月25日（月）9時30分～11時30分  
【場 所】 岐阜市役所6階 6-2会議室  
【出席者】 （会場出席）  
杉山 誠委員長、村井 美代子副委員長、  
石田 達也委員、木田 竜太郎委員  
（オンライン出席）  
田丸 敏高委員  
（欠席）  
両角 亜希子委員

1 開会

2 議事 ※< >は、説明者

- ◆答申骨子（案）及び同概要 <事務局>

◆以下、出席者の意見

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・本日は答申骨子（案）について議論をしていきたい。この骨子（案）を基に、次回答申を作成し、最終的に市長に手交する。委員においては、どの項目についての意見であるか最初に明言し、どのように修正すべきか及びその理由を述べる形でお願いしたい。

1. 将来構想策定に向けた基本的な考え方

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・まず「1. 将来構想策定に向けた基本的な考え方」について意見を伺いたい。

○委員（木田 竜太郎 氏）

- ・少子化とジェンダー平等が「基本的な考え方」の前提となる。
- ・骨子（案）6ページの最後に「リスクを担う機関が求められるようになる」とある。これは全ての大学に言えることだが、出生数が70万人強となったということは、18年後の18歳人口が70万人強になることを意味し、18歳人口を当て込んだ入学者の確保はさらに厳しくなる。そのため、大学院に限らず学士課程であっても、生涯学習機関の機能があるとよい。高等教育機関として、長期的・大局的な観点から、留学生や社会人教育といった18歳以外の入学者の受け入れについても考えるべきである。OECD加盟国の中で、特に日本

や韓国は 25 歳以下の学生の比率が極めて少ない。学費の観点から私立大学では社会人の学び直しが非常に難しいが、公立なので、新しいスキームを作るなどして、社会人や地域のニーズに応える市立大学を検討するとよいのではないかと。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・リスキリングやリカレント教育は、大学のニーズの掘り起こしのために必要なのではなく、地域や社会を豊かにするために大学卒業後の学び直しの仕組みが必要という観点から重要であるので、基本的な考え方として盛り込んでよいと思う。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・骨子（案）1 ページの 4 番目の○が「産学連携」となっているが、「産官学連携」という言葉が主流であるかと思う。公立大学だが岐阜市とは別の機関であるし、今は「官」を別を書くことが多いように思うので、修正してはどうか。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・いろいろな組織が一体になって課題解決に向かうという趣旨なので、ご指摘のとおり修正する。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・自治体を作る大学であるので、私も「官」を入れたほうがよいと思う。
- ・骨子（案）1 ページ 2 番目の○について、「ジェンダー平等に関する社会全般の意識変化や短大進学ニーズの低下等」とあるが、数値を示したほうが説得力があるのではないかと。一般論を述べている箇所ではあるが、これまで事務局で様々な資料を出して説明してきているので、できるだけ数値を入れた方がよいと思う。
- ・全体としては、非常によくまとめられている印象。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・ここはかなり明確な数字が出るかと思うので、数値を入れると説得力が高まるという点は田丸委員と同意見である。
- ・「1」について、リカレント教育やリスキリングといった生涯教育について追加すること、組織の連携について「産官学」あるいはもう少し大きな仕組みに書き換えること、数値を入れることで考え方をより明確に示すことが可能ではないかとの意見をいただいたので、反映したい。（異議なし）

## 2. 大学・地域をめぐる現状

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「2. 大学・地域をめぐる現状」について意見を頂きたい。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・最後の○について、「学力中間層」という問題提起は新鮮で説得力ある優れた見方だが、様々な受け止め方がなされる言葉だと思うので、ここも元となるデータを示して、単に平均的な学力の層という意味ではなく、大学で教育をして伸ばしていくことができる層、可能性をもった層であることを述べるとよい。そのような層が県外へ流出しているという趣旨だと思うので、例えば、括弧書きで説明を入れる等した方が言葉の意図が明確になるのではないか。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・この部分は表現が難しいところ。公的なデータではないが、予備校等のデータを見るとこのような層が現状として存在するので、言葉をもう少し工夫して真意が明確になるよう対応したい。
- ・この点について、石田委員はどう思われるか。

○委員（石田 達也 氏）

- ・この層を具体的に説明することは難しいため、現状として「学力中間層の進学先が非常に限られて」おり、その層が県外へ流出しているということを重ねて述べたほうが強調されるのではないか。具体的な代替表現が浮かばないが、偏差値に言及しようとする表現が難しい。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「学力中間層」は両角委員が使われた表現で、教育関係者にはわかる用語なのかもしれないが、事務局と相談して表現を考えたいと思う。本日全てを決定することはできないので、また皆様にもメール等で相談させていただきながら答申を作成していきたい。（異議なし）

### 3. 将来構想の論点

#### (1) 別学・共学のあり方

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「(1) 別学・共学のあり方」について、委員会の方向性としては共学ということではよろしいか。（異議なし）  
それでは、共学に至るまでの説明について意見があればいただきたい。
- ・2番目の○に関する私の意見として、女子大では女性がリーダー経験を積みやすいといった調査結果があり、その方向性で女子大を強化する動きはあるが、現実には女子大大国といわれる中でリーダーが育ってきたかというところで

はなかったことを考えると、「別学を続けることも選択肢の一つ」と記載することに疑問がある。多様性の中で育つことが重要ではないかという思いがあり、その意味では4番目の○が重要なポイントで、多様性の中に男女共学も含まれると考える。

- ・5番目の○について、まだ私自身の中で十分に整理できていないが、「女子教育発展の理念」を「引き続き大切に」することは必要かもしれないが、新たなものを作ろうとする中ではどうか。私としては、女子教育発展の理念が掲げられた後、女性活躍社会が推進されるようになった際に、この理念が次の段階に入ったと認識しており、単純に当時の理念を「大切に」すればよいものではないと考える。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・委員長の指摘のとおり、確かに理念は大切であり別学も選択肢の一つではあるが、「別学を続けることも選択肢の一つ」との記載があると、別学・共学が両方とも結論であるように見える。また、建学のベースにあった「女子教育発展の理念」を続けていくとなると、答申としてどちらが最終的な結論であるか言いづらい。どちらが結論かはっきり述べたほうがよいが、文言としては削除しづらいので、もう少し文章内に入れこんでしまってはどうか。その回の議論は、これからは共学だろうという意見の流れだったと記憶しているので、共学の方を色濃くまとめていただくとよいのではないか。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・同意見である。別学の選択肢がないわけではなく、理念を大切にすることも否定するものではないが、この委員会における考え方はそこではなく、そのうえで次を目指すという方針であったと思うので、表現を考えたい。

○委員（石田 達也 氏）

- ・別学・共学については、共学に変わっていくべきという方針が明確だったので、直截に言えば2番目の○が必要か疑問である。会議の流れを見ると、委員から選択肢の一つという考え方はあまり出なかったように思う。後半の「納税者～」の表現も思うところはあるが、特に前半の部分については、歴史や今まで続けてきたことも大切ではあるものの、記載する必要はないのではないか。
- ・5番目の○には、共学にすることで今後果たすことができる理念も書き込むとよい。動機をもう少し鮮明にした方が、岐阜市に我々の意見を答申するにあたりよいと思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・頂いた意見を集約すると、2番目の○を少し考えること、最後の○はこれから

の理念について書き方を工夫するというところでよろしいか。(異議なし)

## (2) 4年制ニーズへの対応

○委員長(杉山 誠 氏)

- ・続いて、「(2) 4年制ニーズへの対応」についてご意見を頂きたい。

○委員(田丸 敏高 氏)

- ・4年制ニーズは、別学・共学や提供する学問分野と結びついた議論をしてきた部分である。昔は、女性は家政や栄養、男性は理系、女性は短大で男性は4年制といった性役割の考え方があったが、本委員会においては、これからの社会は男女共に働きながら子どもを育て、同じ役割を担っていくという将来展望に基づき議論を進めてきた。委員会として4年制を推すにあたり、社会が高度化し男女が共に社会を創る必要がある中で、大学教育を必要とする人が多数いるのではないかという観点があったと思うので、これらが結びつきのある議論であったことをここで述べるとよいのではないかと思う。

○委員長(杉山 誠 氏)

- ・確かに、別学・共学等と議論が結びついていた部分である。
- ・短大において編入学が増加傾向にあるが、この点について木田委員や村井副委員長のご意見を伺いたい。

○委員(木田 竜太郎 氏)

- ・3番目の○は、短大が継続する場合を前提として短大のニーズを述べたものかと思うので、4年制を推すのであれば短大の利点等をあえて答申に含めなくてもよいのではないか。また、別学・共学と4年制ニーズは別々の議論ではあったが、田丸委員の意見のとおりであり、本委員会に先立つ懇談会においても、4年制化と別学・共学の議論は不可分であるという結論が出ていたと思う。
- ・3(1)に「別学を続けることも選択肢の一つ」とあるが、ここは両角委員が参加された福岡女子大学の会議での意見が紹介されたものであったと思う。
- ・理念は不変でなければならぬわけではない。むしろ、歴史的な遺産を継承しつつ、それを繋げていく中でまた理念を定め、新たな公立大学としてスタートしていきたいということを強く打ち出す方がよいのではないか。

○委員長(杉山 誠 氏)

- ・3番目の○の趣旨は、短大に編入学のニーズがあるならば、短大を4年制大学としてもよいのではないかということかと思う。

○副委員長(村井 美代子 氏)

- ・最初の○の「社会の高度化に…2年では困難であり、」という箇所は2番目の○の内容が含まれているように思うので、2番目は不要ではないか。
- ・3番目の○について、4年制ニーズや4年制大学への進学率の高まりは会議資料においても示されているため、木田委員が仰ったように、短大において編入学の希望者が多いことを答申にまで含める必要はないと思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・別学・共学と4年制ニーズの議論は結びついているので、少し整理したい。
- ・3番目の○に関しては、短大のニーズが減少している根拠の一つかと思うが、木田委員が仰るように、編入学など、2年後の選択肢が広がる点は短大の利点だが、短大に限ったことではないため、編入学などの仕組みがあればその部分のニーズもフォローできると思う。
- ・高校生の短大への進学ニーズが減少している一方で、一定のニーズがあるという話も石田委員からお聞きしたが、その辺りについて伺いたい。

○委員（石田 達也 氏）

- ・初期の議論でそのように述べたが、委員会においては、将来を考えると4年制ニーズが大きいというのが一致した意見だったかと思う。その意味では、表現の問題だが、最後の○が結びとしては少し弱いのではないか。例えば、「学ぶ場として公立の4年制大学を設置する意義は大きい」のように結んだ方が、上のパラグラフの「4年制大学に舵を切っていく」ことを強められると思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・この部分は私も工夫の余地があると思っている。まず「愛知県と比べて…極めて限られており、」とあるが、多様な学力の高校生の受け皿がないことをはっきり述べた方がよい。そのうえで「新たな進学先をつくる」とし、「思う存分」は情緒的な表現のため削除してもよいと思うので、「地元で学ぶ場を公立大学として充実させる意義は大きい」とした方が、我々の意見を反映できるのではないか。先ほどの「学力中間層」の表現の仕方も含め、少しこのあたりを強く表現する方向で工夫したい。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・「学力中間層」の話に戻るが、短大への進学者は保育士や看護師など就きたい職業があらかじめ決まっておらず、専門的な領域は短大で十分学べる。しかし、今の高校生はすぐに就職するのではなく、その前に考える期間を必要としている。これは高校生が変わってしまったのではなく、今後、社会全体の職業が多様化し、現在の状況から大きく変わる可能性があるためだと思う。こうした中、学力中間層の学生はターゲットとした職業だけを狙うのではなく、AI やデー

タサイエンスの変化にも対応しつつ、もう少し幅広く、これからの社会を見極めながら新しい職業に挑戦しようとする者も多いと思う。そのため、これからは2年制より4年制のニーズが高く、そこが岐阜市において不足している部分だと受け止めている。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・田丸委員の意見のとおり、高校卒業後2年間で将来の方向性を決めてしまうのは難しい時代になっており、高校卒業後に様々な価値を積み重ねながら次のことを考える時間が必要であると思うので、こうしたことを含む表現になるよう工夫したい。
- ・4番目の○は、曖昧な表現を避け、「将来を考えれば」を削除して「…低いことに鑑みると、4年制大学に舵を切った方がよい」と言い切ってよいと思うが、どうか。（異議なし）  
それでは、ここははっきりと言い切ることにしたい。

（3）提供する学問分野のあり方

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「（3）提供する学問分野のあり方」について意見を頂きたい。
- ・「地域活性化」は地域のためだけにあるのかという点だが、これから少子高齢化が進むと都会でも大きな問題が出てくると思われる中で、地方に人口を流すことは我が国にとって重要な施策になる。地域活性化は国民全体の幸せにも関連するので、こうした部分をもっと大きな観点として入るとよい。さらに言えば、幸いにも日本は先進国のうちに少子高齢化に入ることができたが、今後、東南アジアや東アジアの国々は、より大変な状況で少子高齢化を迎えることになる。その際、日本のモデルは国際的なモデルになる可能性があるため、地域活性化には国際的な問題解決も含まれると言える。岐阜市という限られた地域のことではあるが、全国にも波及するという意味で、こうした観点を入れてもよいと思う。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・公立が4年制化すると県外からも大勢の学生が来る。その中には「地域活性化」が必要な地域の学生も多く、この問題を自分の出身地のこととして捉える学生もいると思うので、委員長が仰るように、「地域活性化」という観点に岐阜市だけではなくもう少し広く含められるとよい。どのような文言でまとめるとよいかかわからないが、視野を広げた方が説得力が増す。
- ・「提供する学問分野」の回は欠席したため議事録でしか議論の流れがわからず恐縮だが、骨子（案）5ページで、岐阜市立女子短期大学（以下、岐女短という）の専門分野について、一番上の○には「中長期を考えて必要性を判断する

べきである」、2 番目の○には「専門分野にかかわらず学びのベースとなるものである」とある。(3) の前半で、地域活性化の観点からビジネスやデータサイエンス、リベラルアーツについて言及されているので、この2つだけ違和感がある。現在の岐女短のカリキュラムに関することとして、2つの項目をまとめてはどうか。

○委員長 (杉山 誠 氏)

- ・私も「中長期」の部分は削除し「必要性を判断すべきである」と言い切つてよいと思う。
- ・岐女短の専門分野で社会に貢献してきたものは、衣食住というまさに人々の豊かな生活に結びつく部分だと思う。そこは今後も必要な部分であるとともに、「豊かな生活」が戦後すぐと今とではだいぶ異なっており、食の安全や高齢化といった当時とは違う観点が新たに加わってくることになる。豊かな生活を目指すことは地域活性化の大きなテーマの一つであるので、それを踏まえて社会にどのようなニーズの高まりや現代的な課題があり、そのために次なる貢献が求められている、というストーリーにするとわかりやすいのではないか。

○委員 (田丸 敏高 氏)

- ・この部分の議論において、岐女短が取り組んできた学問や教育の成果を PR するとともに、共学化・4 年制化後もその取組みを生かしていくという視点があつた。また、その中で特に栄養学や建築学は学生のニーズも高く、岐阜市にとっても必要な分野であり、国際コミュニケーションや語学力も引き続き提供していくとよいという意見があつたかと思う。
- ・地域には、産業を育てることと人を育てることの2つの役割がある。産業については、大企業だけではなく中小企業も、国内に留まらず海外とも直接繋がりを持ち、大きな視野をもって、世界に貢献していくことを学び取れるような学問が必要。人を育てる仕組みについて、福山市立大学は保育士や教員養成に特化したのが、様々な仕組みがあるはずなので、何を育てる大学とするかを考えてほしい。まちづくりはまだ学問として形が整っていないため、様々な公立大学が挑戦している分野である。文理を問わず皆で研究することが、公立大学の発展において重要だと思う。

○委員長 (杉山 誠 氏)

- ・これまで岐女短が培ってきたものは大切にすべきであり、豊かな生活への貢献やグローバル化は不可避であるという観点から、岐女短の専門分野を生かさないう手はない、というのが本委員会における全体の意見であつた。その辺りをもう少しすっきりとまとめる必要があるかと思う。
- ・骨子(案)4 ページの上から2番目の○にある、「後継者育成や地域産業を支

えるリーダー」もポイントとなる箇所である。

- ・福山市立大学は教育がベースにあったが、岐女短の場合は、まず衣食住やグローバルが中心となり、次にまちづくりとなる。骨子（案）4 ページ下から 2 番目の○に繋がるが、まちづくりには文理融合や STEAM など様々な分野が関わることになり、こうした素養がなければまちづくりを考えられない、という流れになるかと思う。まとめ方が難しいが、田丸委員はどのようにお考えか。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・実際に岐阜市が 4 年制大学の設置に踏み出した際に詳細が練られていくと思うので、本委員会としては細かい学問分野を規定するのではなく、課題を出して書き残していくことで十分かと思うが、委員長はどう思われるか。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・確かに、本委員会の使命は具体的な内容よりも何が必要かを答申することがミッションであるので、答申には幅広く書き、具体的な内容はまた次の段階で議論いただくようにしたいと思う。
- ・（3）については、文言の修正等はあるが基本的にはこのような流れとし、少し内容をまとめる箇所を作ることとしたいが、よろしいか。（異議なし）  
それでは、一番項目が多い部分であるので、また皆様にメール等でご確認いただきたい。

#### （4）地域連携・機関間連携の促進

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「（4）地域連携・機関間連携の促進」について意見を頂きたい。
- ・4 番目の○に少し違和感がある。「競争」は当然生じるだろうが、必要なものは必要であり、それが結果的に競争に繋がるかは周りが決めることなので、我々が競争を意識した答申を作成するのは話が逆のように感じる。現実的にはそこが問題になるのだろうが、それよりも、公立大学の新設や機能強化を行うことの必要性をしっかりと述べることの方が重要である。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・同意見である。「競争」の箇所は私も気になっていた。「4 年制化すれば、他地域からの進学増加も予想される」でよいのではないか。
- ・文末に「そのこと自体を否定的にとらえる必要はない」とあるが、ネガティブな響きがあるため、「岐阜で学んだことが地元で生かせれば、4 年制大学として意義がある」のような書き方にした方がよい。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・この部分には蝟壺的な発想があるので、「競争」も含め文言を考えたほうがよい。副委員長が言われた「意義」にも関連するが、地域活性化はその地域だけのものではないという見地に立てば、当然の帰結として、卒業生が地元へ戻ること自体は悪いことではないという考えになる。市立大学としては避けられない表現かもしれないが、少し考えたい。

○委員（木田 竜太郎 氏）

- ・「岐阜」の定義についてであるが、4番目の○の「県外に」という部分は、市立大学という観点だとこれが「市外に」となり、規模が小さくなってしまう。岐阜県には、前回会議で述べた資源が西濃に集中しているという地域性や、公立大学が独特な歴史的経緯をもつという背景がある。また、国公立大学として、県立大学が国立大学に移管され形成された岐阜大学のほか、県立の看護大学、市立の短大と薬大がある。大学間連携にも関わることだが、岐阜市と言っても事実上、岐阜県全体を視野に入れつつ、公立大学の設立意義を確立し、社会的役割を担うことになるのだろうと思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・岐阜市の存在感を無視した答申は出しづらいが、(4)の下から2番目の○の「地域との連携において…」で、そのような観点到触れている。実際のところ、岐阜市内から岐女短への進学率もそれほど高いわけではなかったと思う。本当はもっと大きな会議体で議論すべきことだが、難しい。
  - ・この「3. 将来構想の各論点」が答申において最も重要なので、もう一度全体を見て意見があればいただきたいが、どうか。（意見なし）
- まとめると、本委員会において、別学・共学については共学の方向性で一致、4年制ニーズへの対応については4年制にニーズがあるということでよいか。提供する学問分野については、岐女短に今ある分野も大切にしながら次の分野を考え、中核市という岐阜市の特性を生かすこと、地域産業や後継者の育成といった人材育成を行うこと、経営やデータサイエンスを取り入れるとともに更に深い教養が必要であるということによいか。
- 地域連携については、様々な枠組みを活用する中で、地域をできるだけ広くとらえる観点と、地域に留まらず人が育つ場であるという観点があるとよいということによいか。（異議なし）
- それでは、細かい文言などはメールで確認していただきながら進めたいと思う。

#### 4. 今後期待される事項

##### (1) 研究機能の充実

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「4. 今後期待される事項」に関し、まず「(1) 研究機能の充実」について意

見を頂きたい。

- ・「研究」という言葉について、研究成果という意味では社会問題や地域課題の解決に繋がることは確かだが、大学の研究はそのためだけに必要なのではなく、研究を通して人を育てることに重要性がある。大学院の設置に言及しているが、優れた研究の下で人を育てることが必要であり、そのためには大学院が必要だというストーリーがあるとよい。研究を通じた人材育成ということを強く書いてほしい。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・同意見である。見出しが「(1) 研究機能の充実」となっているが、「教育研究機能」と言い換えたほうが、委員長が述べた趣旨がはっきりするのではないかと。大学では、役割を切り離さずに「教育研究機能」という言い方をしている。
- ・最初の○に「世界最先端研究を行う国立大学」とあるが、表現が難しいところ。国立大学も様々な役割を担わされている。恐らく戦後、大学が作られたばかりの頃は、どの地域でも最先端の学問が学べる比較的等質な大学が作られていたのだと思うが、現在は、効率的な投資を目的に役割分担されている。国立大学は、等質性と世界に伍して学問を行うことに重点を置いているため、そこで行われる社会貢献や地域貢献は、どちらかというとも大学で行ったことを地域へ伝えていく方法が中心になる。一方公立大学は、学生も研究者もその地域で起きていることを研究して物事を解決する。そのやり方に意義があることが国内的にも国際的にも認識され始めており、それによって公立大学の人気も高まっている。最先端教育は国立大学、自治体の高等教育政策は公立大学と言い切るのではなく、それは生かしつつも、もう少し地域の中で研究していくことを表せるような文章にするとよい。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「世界最先端研究を行う国立大学とは異なり、」を削除するのがわかりやすいか。（田丸委員から「そうですね」との発言あり）  
確かに、現在の国立大学には様々な使命があり最先端研究ばかりというわけではなく、その部分は「国際卓越研究大学」といったところが担っている。よって、この部分は削除してよいと思う。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・大学はどこも教育、研究、地域貢献の3本柱でやっているため、「研究機能の充実」は「教育研究機能の充実」と言い換えた方が実情を表していると思う。
- ・「最先端研究」の箇所については、地域密着型の国立大学も多数あり、役割をひとつ書くと全て書かなくてはならなくなるので、削除してよいと思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・教育が重要という意見が皆様から出ているので、最初の○に「教育機関であると同時に」とあるが、その前にひとつ○を増やし、教育機関としての研究の重要性を分けて書くこととしてよいか。（異議なし）

それでは、この部分は教育機関としての研究機能の重要性を最初に述べ、それが大学院の設置に繋がるという流れにしたい。

## （２）大学自身による改革・自己研鑽

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・続いて、「（２）大学自身による改革・自己研鑽」について意見を頂きたい。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・最初の○に「時には」とあるのが気になる。改革は大学関係者自身で当然に行うものであり、行うことを決められてそれに従ってやるものではない。公立なので自主的に改革を行うことは構わないと思うが、「時には」と入れた意図が読み取りにくい。「大学関係者」という表現も少し広いように思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・同意見である。他との競争が避けられないから改革しなければならないのではない。大学自身が、自分たちの大学がどうあるべきかを常に意識して改革してこなかった結果として、社会から乖離してしまったということが問題である。まず自大学の使命をしっかりと意識した上で、社会の動向や将来像も加え、常に自己改革を行っていく必要がある。
- ・大学は国際通用性を意識しなければならない。国際通用性というと外に向けた話だと思われがちだが、学修者をきちんと見て、卒業時にどのような能力を身に付けさせるかを見据える必要がある。そのためどのように教育の質保証を行うかが重要であり、それを常に点検していく仕組みを作らなければならない。これまでの大学はそこが不十分な印象があるので、ぜひ新しい大学には、常に自身を検証して改革する仕組みを取り入れてほしい。法律的には認証評価など様々な評価があるが、現状はあまり実質化されていない。この実質化が非常に重要で、外部の目も入れた仕組みづくりが必要である。この項については、抜本的に書き直す必要があると思っている。

○委員（石田 達也 氏）

- ・これまでにあまり述べていない観点から申し上げる。高校生の立場、保護者の立場からすると、自己改革を行うとともに、その内容を情報発信・情報公開することについてもう少し書いてもらえるとよい。これからは、地域や学校へわかりやすく発信することも重要である。新たな大学を作るのであれば、そこも

大切にしていただけるとありがたい。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・重要な観点である。税金で運営する大学なので、透明性の確保については書き込むべき。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・同様の意見だが、最初の○について、大学は内部質保証のため、学校教育法や大学設置基準に定められた事項を実施していくが、現在は学修者本位の考え方が当然になっているため、教える側の都合ではなく、学修者がどのように学んだかを点検評価し、公開することが必要である。そのような考え方の下、学生にとって学び甲斐がある大学づくりを地域と一緒に考えてくれるような大学にすることが大切である。評価者と被評価者が不均衡な関係にあり、いつも評価を気にして遠慮しているようなやり方ではなく、委員の皆様が仰るとおり評価の透明性を確保し、責任転嫁し合うのではなく一緒に問題を解決する仕組みができると、とても公立大学らしく魅力的な大学になると思う。それを示すには、自己研鑽よりも内部質保証や学修者本位の大学づくりについて書いた方がわかりやすい。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・これまでの認証評価もそうだが、良い評価のために一生懸命やるのではなく、しっかりと問題点を出して解決することでより良くするという正のサイクルを作ることが改革や評価において重要であるので、そのような部分を書くといよい。大学は大変になると思うが、こうしたことは今後必要になる。現状、大学は法律の遵守だけが目標になっている感が否めないで、そうではなく本来あるべき姿を答申に書き込むといよいのではないか。

○委員（木田 竜太郎 氏）

- ・基本的な方向性は皆様に同意するが、大学院の設置や提供する学問分野のあり方については現実的な部分も考える必要がある。現在の短大を4年制化し、更に大学院を設置するには、引き継ぎ方が現実的な課題になる。現在の岐女短の学問分野に新しいものを追加するといった課題と同時並行で、そのような部分を実務的に詰めていかなければならない。現場の先生方は研究者として多くの業績をお持ちのことと推察するが、大学院の設置については細かい部分を詰める必要があり、80年代や90年代の私立大学に見られた所謂アクセサリ型の修士課程だけを置いてあまり意味がない。大学院における学生募集には難しさもある。高水準の研究要件に対応する博士課程の設置も考えることになると思うが、学問分野によって状況が様々であり、事実上修士を出ていないと就職

が困難な分野もあれば、栄養や人文社会学系のような必ずしも修士を必要としない分野もあるため、大学院の研究科は考え方が難しい。この委員会が所掌する内容ではないが、中期的な課題だと思うのでお示しする。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・現在、文系の大学院における課題は日本中にあるが、だんだんと変わってきていると感じており、社会のニーズも出てきている。ただ、理系と状況が異なるのは確かである。修士が定員に満たず苦勞しているという現実はあるが、そこで必要なものは大学院の改革ではなく、学部の改革であろうと思う。先ほど（1）で申し上げたことは、学部から大学院への接続を視野に入れた教育を学部教育で行うとよいという意図で述べた。この部分は重要であり、大学院の有無によって変わってくる。そこに大学院を設置する意義があり、教育を推進するための研究にも繋がるので、そこを考慮して書きたい。
- ・この項は大幅に書き換えたいと考えているので、事務局と相談して修正し、また皆様に提案するという形にしたい。（異議なし）

（3）関係者の意見の反映

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・「（3）関係者の意見の反映」について、高校生に言及しているので、石田委員の意見を伺いたい。

○委員（石田 達也 氏）

- ・高校生に地元どんな大学があるとよいか聞くと、それなりの情報は得られるかもしれないが、大局的な見地からの意見が出るかという疑問である。最後の○にあるように「高校の担当教員から直接意見を聴くこと」になるが、その場合は、会議冒頭のように「学力中間層」に対する大学が必要という意見になると思う。
- ・ここからは答申に書いていただくことではないが、どこかの機会だと思っていたことをお話しする。私自身の意見とも重なるが、高校の担当教員から意見を聴くと、学問分野のあり方が一番の関心事になると思われる。岐阜市立の4年制大学の規模や学問分野を考えたとき、総合大学や大規模大学を展開することは難しいと思うが、その場合、総合大学よりも強みをより鮮明に打ち出す必要がある。強みがわかりやすいほど、その大学で学べることや力を入れていることについて、高校の教員が高校生に強く説明することができる。反対に「いろいろなことができる」というだけでは、高校生のニーズと合致するか判断できない。繰り返しになるが、答申に書いていただく内容ではないが、大規模総合大学にならない可能性が高いほど、強みを鮮明に打ち出す必要がある。
- ・個別最適化という方針で、小中高では一人一人に応じた教育の必要性が叫ばれ、

移行しつつある。大規模大学ではないからこそ、個別に行うことができる教育も強みの一つにできるとよい。

- ・岐阜市や岐女短において学問分野のあり方や大学の強みを考える中で、このような観点からも検討いただけるとよい。他大学との競争は避けられないので、この部分が鮮明でないと、私立から県立への移行当初は志願者が集まったがその後は苦戦しているという大学の例のようになりかねない。改革した後になんていくなかは、この部分が大きなキーポイントになる。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・高校の先生に意見を聴くことは非常に重要で、現在の高校生の情報も得られ、大学のあるべき姿も見えてくる。そこで出てくる意見は次の段階のことになるだろうが、見えてくる大学像は石田委員が仰ったとおりでと思うので、それを描きながら進めたい。
- ・私の意見として、2番目の○は過去の意見、3番目の○は現在の意見であり、いずれも重要で参考にすべきである。しかし、将来構想はこれらを参考にしながら次のステップに進むものなので、最終的にはこれらの意見を反映させつつも、将来を考えるという流れにしたほうがよい。重要ではあるが、過去にとらわれすぎてしまうという意見も多く見受けられるため、特に過去の意見については参考に留めることも必要である。様々な意見を伺ったうえで、将来を見据え、10年あるいはもっと先の社会の状況も視野に入れて構想を作ることが重要なので、最初の○は「反映」ではなく「参考」という書きぶりでよいのではないか。意見を聴いてはいけないとまでは言わないが、関係者の意見を集約したらこのような大学ができた、というのは目的にそぐわないと思うので、書き方を工夫するとよい。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・公立大学協会では様々な資料が公開されている。公立大学の数は国立大学の86校を抜き約100校となった。また、公立大学の学生には富裕層が少なく、国立や私立に比べて経済的に苦しい学生が多い中、真面目で、手に職を付けたいと考える学生も多い傾向にある。このような公立大学の人気の理由や志望する学生の傾向、教育内容等について、協会の資料を検討の参考にするとよい。
- ・大学人としてあまり資格やスキルのことは言いたくないが、取得可能な資格は高校生に対してメッセージとなるので、建築士や栄養士等の取得できる資格についても検討するとよいと思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・最初の○に関し、高校生等のニーズをとらえることという趣旨だと思うので、その部分は答申にもしっかり書きたい。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・石田委員の意見のとおり、「意見を聴く」ということは、こちらから発信したことに対する考えを聞くことになる。3番目の○に「高校の担当教員から直接意見を聴く」とあるが、今後、将来構想を踏み込んで考えていくときに、大学側からもこういう教育をしたいという考えを十分に伝える必要がある。それに対して意見が出てくる。漠然と高校生にアンケートを取っても、あらゆる分野を学びたいという意見が出てきてしまう。今後の具体的な教育内容について、教員が熱意をもって高校側に伝えた上で意見を聴き、より良いものにしていくのが望ましい。答申には発信して意見を聴くということを追加してほしい。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・高校の担当教員と十分なコミュニケーションを図り、一方向だけでなく双方向で行うとよいということか。（村井副委員長から「そうですね」との発言あり）同意見である。その中で将来構想に繋がる意見が出てくると思うので、単に「意見を聴く」のではなく、コミュニケーションをとるという書き方にしたい。

○委員（木田 竜太郎 氏）

- ・2番目の○にある卒業生の意見について、委員長が仰るように、過去の在籍者の「昔はよかった」という意見を聞くだけでは良くないが、村井副委員長の意見のように、コミュニケーションをとることは必要である。私が見ていると、東京教育大学の同窓会と筑波大学、旧東京都立大学の卒業生と首都大学東京は折り合いが良くない。この大学においては、不幸な形にならないようにコミュニケーションをとり、知らないところで母校が変わってしまったという印象を卒業生にもたせないようにするという観点で、この部分は必要であると思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・まさしくその通りである。大学を主に支えてくれるのは卒業生であり、乖離するのは良いことではない。卒業生は母校の今後を一生懸命考えてくれる方々として重要なので、コミュニケーションの必要性について追記したい。
- ・（3）については文言を修正することとしたいが、よろしいか。（異議なし）

**総括**

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・本日の議題は全て終えたが、全体を通して意見があれば頂きたい。（意見なし）それでは、頂いた意見を基に修正し、メールなどでコミュニケーションを図りつつ答申案を作成し、次回の会議でまた検討いただくということによろしいか。（異議なし）

これで今回の議論は終了とし、頂いた意見は事務局で整理してもらおう。

### 3 閉会

○事務局（企画部 総合政策課大学改革推進室）

- ・委員長ご発言のとおり、事務局で修正案を作成し、委員の方にメール等でお示ししたい。
- ・次回は1月26日14時開催予定。最終回となるのでよろしくお願いします。